

経済史はどのような学問か

斎藤修

はじめに

経済史、あるいはやや広く社会経済史とはどのような学問かという問題は、通常、経済史ないしは社会経済史は何を研究対象とする学問かという意味でなされる。それだけにたいする答は出版されたものだけでも少なからずあるけれども、その学問のプロセス、研究作業の現場はどのようなものか、他の分野と比較してどのような特徴をもっているのか、という観点からみた経済史あるいは社会経済史入門はあまりない。しかし、学問の楽しみにとって、対象のおもしろさもさることながら、学問をする過程自体が知的に楽しいということも重要な要素である。その「過程」、「作業」のすすめ方を（その作法の体系と

ともに）方法と呼ぶならば、社会経済史においてはどのような方法が用いられているかも、入門者にとっては重大な関心事に違いない。

一般的にいつて人文社会科学には、書物を静かにじっくりと読みこなし、論理の詰め何時間も費やさなければならぬタイプと、腕まくりして、ときには額に汗して資料の収集と整理に時間をかけなければならないタイプとの、二つがあるように思う。完全にどちらかと割り切れることは少ないかもしれないが、哲学や文学を前者の典型とすると、実証的な学問の多くは後者に属するといつてよいだろう。社会経済史は、もちろん後者である。しかし実証的といつても、現場にゆくと、実際の研究作業は学問分野によって実にさまざまだ。たとえば、考

古学の現場と計量経済学の仕事場と政治史家の書齋とでは一寸見にもずいぶん違う。ただ、これらの分野それぞれには、一つの共通した雰囲気というものが感じられるであろう。

ところが社会経済史となると、それも多様すぎて、その学問に特有の現場イメージは存在しない。その理由は経済史と社会史という肌合いの違う二つの学問にまたがるから、ということではないと思う。むしろ、イメージは社会経済史家ごとに異なる。狭義の経済史においてさえ、文献学に近似したタイプから計量経済学的なタイプまで、経済史家ごとに違っているのが実状ではないだろうか。私が本稿で述べたいと思うのは、社会経済史におけるこの方法の多様性についてである。人類にとって生物学的多様性の保持が良いことであるのと同様に、歴史学の諸分野にとって、とくに社会経済史にとっては方法的多様性が存することは良いことだ、学問的に健全な証拠だというのが、私の主張したいポイントである。

一 ある社会経済史家の場合

もっとも、こういう方法論は、抽象的に論じてあま

りピンとこないものだ。そこで、一人の優れた社会経済史家の作品をみることによって、どのような方法が駆使されているかをみることにしよう。

私が紹介したいのはトマス・スミス(Thomas C. Smith)⁽¹⁾という歴史家である。彼は『明治維新と工業化』⁽²⁾および『近代日本の農村的起源』の著者として知られているとおり、徳川時代から明治期までの日本経済史・社会史を専攻している。彼には一〇編の論文を一冊にまとめた論文集『日本社会史における伝統と創造——工業化の内在的諸要因、一七五〇—一九二〇年』もあり、ここではこの論文集(以下『伝統と創造』と略記)を中心に取りあげる。⁽³⁾三〇年余にわたる社会経済史家としての著者の歩みが一望にできるからである。⁽⁴⁾

本書を繙いた読者は、著者についてどのようなイメージをもつであろうか。タイトルとサブタイトル、それに目次をみただけでも、徳川中期から大正時代までをカバーでき、経済史から社会史までを論じられる、幅の広い、(華麗ではないが)多彩なテーマについて研究をしてきた歴史家というのが最大公約数ではないかと思う。著者スミスも、本書『伝統と創造』を構成する一〇章は、

「前近代経済成長」、「徳川社会の変質」、「初期工場労働者の意識」という三つの異なったテーマ群に分類することができるといい、とくに最後のテーマ群に属する二章は、著者自身、個別論文として発表したときは「他の章とは関係ない」と思っていたという。

しかし、これも著者自身が述べていることであるが、本書を貫く問題関心は一つである。「日本はいかにして近代社会になったか」、それも、経済の工業化や社会の近代化といった普遍的現象を推し進めた要因のなかで、伝統的な要因が果たした役割に注目すること、すなわち「深部において」西欧の場合とは異なった近代社会への変容の過程を明らかにすること、である。近代資本主義の進展によって「どの国も類似した社会」になる、「西洋社会のように」なるはずだという考え方、「収斂説」と呼ばれることもある、現在でも強い影響力をもっている考え方とは異なったスタンスによる、近代社会成立史といえよいのであるうか。すなわち、『伝統と創造』において徳川時代の農家世帯が分析される場合も、士族革命が取りあげられる場合も、また明治の工場における時間規律と労働者の時間意識が説明される場合も、そこ

には一貫した問題関心と視角があったのであり、それは三〇年余にわたって変わらなかつたのである。

だが、これらのことはすべて著者自身が述べていることである（『伝統と創造』序章⁽⁵⁾）。そこで私は、著者が触れていないこと、すなわち多彩なテーマを説明するために用いられた手法と方法論に目を向けたい。そこでも、私たちは多彩さに遭遇するはずである。とくに、実証性が高い第一部と第三部では、対照的といってもよい方法が採られている。

二 数量データと事実発見

本書第一部を構成する四章のうち三つは経済史の、残りの一つは歴史人口学の論文である。これらはいずれも「前近代経済成長」(pre-modern economic growth)という概念枠組に収まるテーマを扱っているが、個々の論文相互には直接の関連がほとんどない。共通するのは、むしろ数量的なデータ処理という点においてであろう。

貢租率の時系列

たとえば、「徳川時代の年貢」と題された第二章をみ

てみよう。一九五八年に書かれたこの論文の主題は単純明快で、幕藩制下の「年貢は重圧であったか」である。

この問題のたて方は、通説からみれば相当に挑戦的である。徳川時代の農民は重い年貢に苦しんでいたというのが、いまでも一般的なイメージだからである。もっとも、その課題に応えるためにとられた方法は単純なもので、七藩における一一の村の、一〇〇年あるいはそれ以上におよぶ貢租データを収集し、年々の貢租納付高を公式査定産出高である石高で除した貢租率を村ごとに算出、グラフを描いてみるというものである。その結果わかることは、村の石高が変化することはほとんどなく、査定産出高は現実の産出高と乖離を大きくしていったにちがいないということ、および貢租率はたしかに高水準にあったが、有意な長期的上昇を示すところはどこにもないということであった。論文ではさらに多くの頁を、この結果がどれほど確かかの検証と結論の意味と意義の検討にあてているが、そこでの主要な努力は必要な村方データを集めることとそこから数字を拾い出すことに注がれ、貢租率というキィとなる値の計算そのものはきわめて単純明快であることがわかる。

都市人口統計

「前近代経済成長」という第一部の基本問題そのものをタイトルとする第一章は、分析としてははるかに複雑である。産業革命以前においてみられた経済変化、とくに農村部を中心に生じていた変化にかんして、西洋の歴史的经验との比較が意識されている。また、アレグザンダー・ガーシエンクロンの工業化論にたいする批判的含意も述べられており、射程距離の長い議論が展開される。

しかし、実証的な意味における本論文の中核部分は城下町人口の推移を検討することであった。ここでも努力のほとんどはデータの収集にあてられる。ベンチマーク年次を一六八〇年、一七一四年、一七四〇年、一七九四年、一八三四年とし、三五の城下町についてわかるかぎりの人口数値を書きあげる。そして、ベンチマーク年次間の人口増減率を計算、変化パターンを類型化して、それを地図上に落としてみるというのが、その作業の主要部分である。さらに、その結果は当該の城下町を含む地域人口の推移と比較される。その観察から、城下町の多くは人口減少を記録していたこと、顕著に衰退した城下

町の少なからぬ事例は経済的に先進地であった近畿・瀬戸内地方に属し、しかもその場合、城下町の周辺地域では人口の増加がみられたのである。著者は、このような都市人口の衰退を周辺農村における手工業および商業の成長と対比させ、両者は「何らかの関係」をもっていたと考える。スミスが本論文を発表して後に提唱された概念を援用していいかえれば、プロト工業化 (Proto-industrialization) の進展が都市人口に与えた影響と解⁽⁶⁾釈されるのである。

これが著者スミスの比較前近代経済成長論の出発点であるが、その重要な事実発見を導いたデータ観察自体は、⁽⁶⁾ けっして複雑ではない。都市人口統計を整え、人口増減率を計算し、農村部の人口趨勢を表すと看なされるデータから得られる増減率と比較するというもので、統計学的には難しい手法が使われているわけではない。基準をきちっと合わせたデータ作成が研究作業のポイントであった。

このように、これら二論文は数量史とはいっても、とりたてて特別な分析手法が使われていたわけではない。データ処理の主要な目的は事実の発見にある。ただ事実

といっても、一村落ないしは一地域の全貌を明らかにしようという個別事例研究ではなく、むしろ、同一の基準でのデータ収集、データの標準化、同一指標の算出という点に通常の歴史家以上に神経を使ったという点において、数量史的な傾向をみることができるとのである。

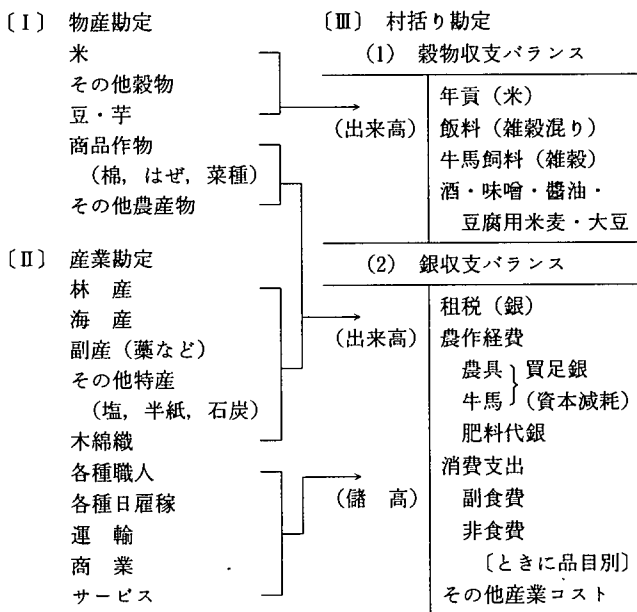
三 数量分析

これにたいして、第一部における他の二論文は趣を異にする。数量データの重要性は変わらないけれども、分析の手法に新しさが加わる。

地域所得の推計

「前工業化期日本の農家副業」と題された第三章をみよう。タイトルはきわめて限定された課題を扱っているようにみえる。しかし研究的にいえば、農家副業は右にみた前近代経済成長の一表現であり、農村工業化の担い手であった。ただ、「副業の形態が散在的、また非常に多様かつ流動的であるため、どのくらいの農民が副業を行い、所得のどの程度をそこから稼いでいたか」を知⁽⁶⁾ることは資料的に非常に難しい。それゆえ、一八四〇年

表1 『防長風土注進案』の勘定体系



代前半に長州藩によって作成され、『防長風土注進案』として知られる「驚異的に詳細な経済調査」は貴重な資料である。本論文は、それを利用して、上関宰判と呼ばれる一地域内の一五村落の副業状況を明らかにする。

けれども、方法論的にいうと、この資料から数字を拾い出し、それを集計したり、足したり引いたり、割算したり掛算したりしても、求める経済指標は必ずしも得られない。たしかに、人口や平均世帯規模、総世帯数にしろる農家ないしは非農家の割合などを、そういった方法で求めることはできよう。村の人口数・家数、さらに職業別の家数も掲げられているからである。しかし、ここでもっとも重要なのは、村落所得や農家所得を算出し、そこにしめる非農家所得の割合を計算することである。たしかに、この『風土注進案』が近代以前の資料として特異なのは、「支出」と並んで「所得」にかんする書上があることで、それも農業からの所得と、手工業あるいはサービス産業からの稼得等が区別されているのである。表1は、スミスの本からではなく、その後西川俊

作が同じ資料を精査したときに作成した、『風土注進案』の経済計算体系模式表であるが、それによっても、「物産」と称された農業活動と「産業」と呼ばれた非農業活動が区別され、さらに「農作経費」や「消費支出」も独立項目としてたてられていることがわかる。けれども、これらの出来高と儲高を集計したら村落所得が求められるのであろうか。具体的にいえば、物産勘定中の米の出来高と、産業勘定中の桶工の儲高と、米を原料とし、桶工の作った大樽で仕込んで清酒を製造する酒屋の儲高、さらには米や酒の移出に携わる廻船関係の諸儲高、というように書上げられた数字を足し合わせてゆけばよいのであろうか。答は否である。それでは原材料や修繕・修理の部分が二重計算となってしまう。所得というのは付加価値概念であり、したがって徳川時代の村落所得が問題の場合といえども、必要とされるのは現代の国民所得勘定と同じ概念体系なのである。

本論文に付された「補遺」をみれば、著者スミスがこの点に十分な注意をはらって本文の表を作成したことが明らかである。職人の稼高のように漏れの多い項目は推計によって補い、役人の俸給として藩から支出された額

を加え、評価価格を慎重に統一し、そして村括り勘定中の銀収支バランスに出てくる、家畜・農具の買足銀(資本減耗)、肥料代銀といった「農作経費」、「その他産業コスト」に一括されている原料代や家屋・船などの修繕費からなる費目を財・サービスの総出来高から引いている。すなわち、中間生産財とサービス(intermediate goods and services)を控除した付加価値(value added)の総額になるような推計作業が施され、そのうえで非農業所得の割合が計算されているのである。その結果は、表2に示されているように、世帯数にしめる非農家の割合は一八%にすぎないが、地域所得にしめる非農業部門のウェイトは五五%にたっていたという、まことに興味深いものであった。⁽⁸⁾

この『風土注進案』は類稀に良質の資料である。スミスが行ったのと同様の作業は上関宰判だけでなく、長州藩一円について行うことができる。また、所得計算だけではなく、そのなかの特定の項目(たとえば個人消費や政府投資)に焦点をあてた詳細な分析も不可能ではない。さらには、別の方向への発展も可能である。中間投入にかんする情報があるということは、投入量全体を把握す

表2 長州藩上関宰判における非農割合

	世帯数に 非農割合(%)	所得に 非農割合(%)
計	18	55
最低の村	4	23
最高の村	56	83

知識が必要とされ、データの整理・加工もその知識なしには不可能であったという事実であろう。これは第一の数量史とは基本的に異なったポイントである。

人口行動

第四の論文に目を転じよう。対象領域も経済史から歴

ることも不可能ではないということである。それゆえ、さらにいくつかの仮定と操作を施すことによって長州藩経済の投入・産出表(Input-Output table)を作成することもできないことはない。

実際、前者の方向での拡張も後者の方向での発展も、ともに一九八〇年代にはいって試みられることとなった。⁽⁹⁾とはいえここで重要なことは、農家副業の比重を明らかにするという、より限定された課題を達成する場合であっても、明確な経済学の理論枠組についての

史人口学へと代わる。歴史人口学は社会史の一分野といえないことはないが、それ自体で独立した研究領域といったほうが適当であろう。結婚・出生・死亡といった人口現象の結果として総人口が変化するプロセスと、それら人口学諸変数相互の関連のあり方を解明するのが目的だからである。

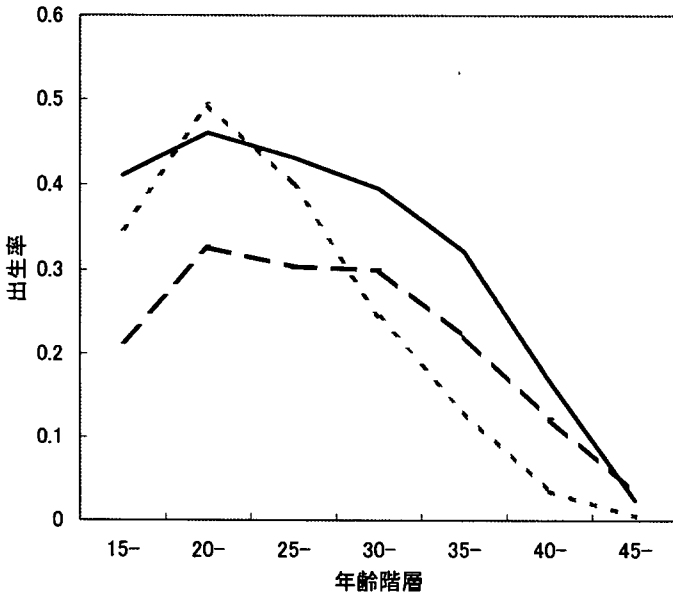
ここでは濃尾平野にある一農村(仮名でナカハラ村と呼ばれている)に残された宗門人別改帳を資料とし、そこから、個々の家族において生じた、結婚・出生・死亡といったすべての人口現象を追跡し、そこから種々の人口学的指標が算出される。たとえば、家族ごとに出生の記録を整理、出生率を算出し、それをグラフに描く、といったことである。ナカハラ村は仮名であるから、そのデータを示すことはできないが、そこからさほど遠くない村の宗門人別改帳から復元されたある家族の出生記録をみてみよう⁽¹⁰⁾(図1)。惣左エ門という水呑百姓と女房のあいだに産まれた子供の数は八人、全員が二〇歳まで生き延びたので、子宝に恵まれた夫婦といえる。家族ごとにこのようなシートを作成してゆけば、何年に出生数が何件あったかという統計だけではなく、夫婦当りの出

(59) 経済史はどのような学問か

図1 濃尾地方一家族の出生記録

順位	名前	性別	出生年月	母親年齢	出生間隔	死亡年月	死亡年齢	結婚年代	結婚年齢	結婚先 (FRF No)	宗派	備考	個人番号
1	ゆき	F	1798-	20	1-	1824-	27	1819	22	大垣		1811 E	32-011
2	たみ	F	1800-	22	2-	-	-	1827	28	南条村		1813 E	32-012
3	惣太郎	M	1802-	24	2-	1859-	58	1848	47	32B-1		1848 V	32-013
4	春吉	M	1806-	28	4-	-	-					1815 E	32-014
5	との	F	1809-	31	3-	-	-					Y	32-015
6	作蔵	M	1813-	35	4-	-	-	1840	28	32A-1		1840 Y V	32-016
7	与三称	M	1815-	37	2-	1853-	39						32-017
8	すへ	F	1822-	44	7-	-	-	1844	23	勝村			32-018
9			-	-	-	-	-						
10			-	-	-	-	-						
11			-	-	-	-	-						
12			-	-	-	-	-						
13			-	-	-	-	-						
14			-	-	-	-	-						
15			-	-	-	-	-						

図2 年齢別婚姻出生率の比較



——標準 - - - ジュネーヴ - ナカハラ村

生数、母親の年齢階層別にみた出生数といった、人口学的により精緻な指標を算出することができる。

実際、そこから作成されたグラフ (agespecific marital fertility、有配偶女子の年齢別特殊出生率あるいは年齢別婚姻出生率と呼ばれる) をナカハラ村について描いてみると(図2)、二つのことに気づく。第一に、他の地域、とくに意図的な産児制限をしていないことが明白な標準人口の出生力と比べて低位水準にあったことであり、第二に、そのグラフの形状は標準人口のそれとあまり大きく異ならないということである。いま標準人口のすべての夫婦が二〇歳で結婚し、五〇歳になるまでに産み終えたとしよう。図2に示された実線のグラフから計算される、その間の出生数は九人である (total marital fertility、合計婚姻出生率という)。これにたいして、同様の計算をナカハラ村について行うと六・五人にしかならない。この合計婚姻出生率水準は、やはり同図中に描かれた一七世紀のジュネーヴ市民の場合と同じである。しかし、ジュネーヴの婚姻出生率曲線の形状はナカハラ村のそれと大きく異なっている。すなわち、一七世紀後半のジュネーヴでは、第四児、第五児の出産を忌避する

という、産児制限が行われ始めたことが知られており、そのような行動は、出生率曲線における三〇代から四〇代にかけての急速な水準低下となって現れるのである。別ないい方をすれば、第一の観察事実からは意識的な産児制限(徳川時代の用語では「間引」)があったのではないかという疑念がでてくるが、第二の事実、ナカハラ村の出生率曲線が「普通そうした制限の欠如と結びつく種類」のタイプであったことを示しているのである。

それでは、なぜこの村の女性たちの出生力はいくも低位であったのか。著者は、普通とは異なった、より複雑な、性選択的な産児調節が行われていたのではないかと、という仮説をたて、それを宗門人別改帳から作成された家族データベースを分析することによって検討する。複雑な調節というのは、たんに子供数だけではなく、性別も問題であり、しかも女兒だと間引かれやすいということではなくて、既存の子供が圧倒的に男児に偏っている場合、次子が男児であることが多く、逆に女兒に偏っていた場合には次子が男児となることが多いのではないかと、というのである。そこで、すでに二名以上の子供が人別改帳に登場する家族を選びだし、男子優位の家族、女子優位

の家族、男女同数の家族に分類、それぞれのグループごとに次に産まれてくる子供の性比（女子一〇〇当りの男子数）を計算する。その結果は、仮説どおり、男子優位の家族グループでは性比が低く、逆に女子優位の家族グループでは性比が有意に高く出たのであった。著者はここから、間引は貧困の婦結というより、家族規模と構成とを最適に保ちたいという意思の表現だったのではないかと考える。それは小農民であっても「長期の計画を遂行する見通しと能力」が必要とされたということを含意し、従来の農家族イメージに変更を迫るものである。

これは多くのひとを驚かす結論であったし、ナカハラ村のデータを前提とするかぎり、かなり説得的な分析でもあった。もっとも、現在、このタイプの産児調節が一般的であったとは考えられていない。他の村の資料を使った追試に合格しなかったからである。

しかし本稿の関心事は、ナカハラ型の間引の有無といった内容に関わるのではなく、スミスが援用した方法論にある。個々の家族データから構成されるデータ群がある基準によって再分類し、仮説から予想される結果が得られるかどうかを検証するという手法は、歴史人口学

の基本的方法の一つだということである。そしてそれは、ミクロ・データを駆使する数量史的な歴史研究において有効な方法論の一つでもある。第一部の第四章、およびそれを発展させたモノグラフ『ナカハラ』は、その見事な雛形といつてよい。

四 文書資料の読解

第三部を構成する二つの論文は、第一部とはまったく異なった方法論によって書かれている。両論文とも「労働者の意識」を問題としている。第九章のテーマが時間意識、第一〇章では権利意識が検討されている。これらの「意識」を明らかにするために行われているのは事象のカウントではなく、資料の「読解」である。もっとも、第九章の註をみると、二三四回のストライキにおいて労働時間を争点とした回数は何%であったかといった計算は行われている（一八九七年からの一〇年間で三%、一九二一—三〇年においては休日問題も含めて二%であった）。しかし、論文執筆のために費やされたエネルギーの大半は、当時の諸文献を「読む」ことにあてられたのであった。

第一〇章からみてみよう。この主題について考え始めたとき、著者はまず、「初期の工場ストライキと徳川時代の農民一揆との顕著な類似性」に気づいたという。ついで、日本の労働者は西洋の労働者とは違って、「ほとんど権利というものに言及することなく」「その代わりに地位に応じた公平という考え方に訴えたこと」に興味をいだいた。「権利」の主張よりは「人格」承認を要求し、権利を主張する場合でも「恩恵」を求める権利の要求であったことに關心を惹かれたのである。それは研究書を読んだり、たまたま目を通した伝記をみての感想であったかもしれない。しかし、それを確認するためには明治から大正に発行された文献を系統的に集め、読まねばならなかったはずである。その文献の主要なものは、片山潜が主宰していた雑誌『労働世界』や友愛会の『友愛新報』などである。八幡製鉄所の労働組合機関紙『東洋タイムス』も、さらには同製鉄所が労働者向けに発行した『くろがね』も検討の対象には入っている。

時間意識の問題を扱った第九章では、第一〇章より明示的に徳川時代との連続性を論じている。明治期にかんしては第九章と類似の文献や伝記が使われているが、徳

川農民の時間意識を探りだすために著者が当たったのは農書であった。これは慧眼といふべきで、大部分は自ら農耕に従事した農民の手によって書かれた農業技術のマニュアル、ないしはそれに類したパンフレットである農書を読み解くことによって、農民が時間についてどう考えていたか、時間管理をどのようにしていたかを明らかにすることができるところを、著者は発見したのである。⁽¹³⁾

そこからわかったことは、徳川時代の農民は「時間の大切さについて、鋭敏な、道徳に根を下ろした観念」をもっていたこと、いいかえれば、彼らに独自の時間規律が存在したこと、しかしその時間は個人主義的な時間ではなく、社会的に管理された時間であったということであった。そして、そのかぎりにおいて、明治時代における工場労働者の時間観念も変わらなかったというのである。このような結論は、明治の労働雑誌とともに、徳川時代の農書を系統的に読むことから得られたものであった。

方法論という観点からみたポイントは、第一に「系統的に読む」ということである。哲学者や文芸評論家がテクストを読むような読み方とは少し違って、あるいは「神は細部に宿る」という、ミクロストリアの社会史家

が、いさぐち信念とも異なつて、まとめて読むことが重要である。労働雑誌なら、特定の著者が特定の問題を論じた記事だけを探して見るのではなく、ともかく創刊号からすべて当たってみることが必要なのである。

第二に、しかし、字面を読んで引用を重ねるだけでは、当時の労働者の思考様式を探り当てる読解力が必要である。書かれた文章の背後にあるものを読みとり、それらを一つの像に構成してゆく力が要求されるのである。究極的なゴールは、当時の農民や労働者の意識を再構成してみせることだからである。

五 おわりに

以上みてきたことから、トマス・スミスは少なくとも三つに分類される、相異なつた方法論を使い分けてきたことがわかつた。第一と第二はともに数量史のカテゴリーにはいるものなので、両者を使い分けることはそれほど難しいことではないが、第三は他とはまったく異質の方法論である。それだけに本書『伝統と創造』は、テーマの多彩さだけでなく、方法論的多彩さにおいても目を見張るものがある。

これは超人的な能力といわねばならない。もっとも、トマス・スミス以外に例がないわけではない。アナール学派のエマニュエル・ルロワ・ラデュリやケンブリッジ・グループの総帥ピーター・ラスレットなども、複数の方法論を駆使してきた歴史家といつてよいように思う。ルロワ・ラデュリは歴史学における「数量化革命」を唱道したと同時に、個の読解による物語『モンタイユ』の著者でもある。ラスレットは『ロック全集』の監修者の一人であると同時に、数量史的な人口と家族の歴史社会学を樹立した歴史家である。ただ、彼らが歴史学分野において例外的な存在であることに変わりはない。

しかし、本稿で私が強調したいことはそういうことで必ずしもない。先にも述べたように、スミスには一貫した問題関心があつた。それは、彼自身の言葉によれば「日本はいかにして近代社会になつたか」であるが、私はその問題意識の底にはさらに、過去の社会に潜む「隠れた構造」(covert structure)を明るみにだしたいという志向があつたのではないかと思つている⁽⁴⁾。徳川農民の生産行動・人口行動、家や村を中心とした社会行動、明治の労働者の労働観・時間意識、彼らの労使関係観、

そして彼らに共通した計画観念——これらは、書かれた資料から直接知ることのできないものである。それだけに、そのような「隠れた構造」をどのようにして明るみに出すかは歴史家のスキルに委ねられている。スミスは特定の主題とそのため選ばれた資料群と格闘するなかで、もっとも相応しいと考えた分析の仕方を模索してゆくうちに、結果として異なった方法論を身につけていったのだと思う。

そして、それは社会経済史を専攻しようとしている人びとにとって、重要な教訓を示している。研究において何をテーマとするかは、個々人の問題である。しかし、スミスが教えてくれるように、一つの問題に接近するにはさまざまな途があり、したがって必要とされる方法論もさまざまでありうる。ひとは自分の気質にあった方法論を選べばよいのである。そして、多様なスキルと多様なアプローチの歴史家と作品が共存しているということも、それだけ多様な発見を導くものだということも、またスミスの業績が教えてくれるところなのである。

(1) 杉山和雄訳(東京大学出版会、一九七一年)。原著は、

Political Change and Industrial development in Japan: Government Enterprise, 1868-1880 (Stanford: Stanford University Press, 1955).

(2) 大塚久雄監訳(岩波書店、一九七〇年)。原著は、*The Agrarian Origins of Modern Japan* (Stanford: Stanford University Press, 1959).

(3) 大島真理夫訳(ミネルヴァ書房、一九九五年)。原著は、*Native Sources of Japanese Industrialization, 1750-1920* (Berkeley: University of California Press, 1988).

(4) この他に日本語訳のない歴史人口学の著作がもう一冊あるが、その内容の一端は論文集『伝統と創造』の第四章から窺う知ることが出来る。Nakahara: *Family Farming and Population in a Japanese Village, 1717-1830* (Stanford: Stanford University Press, 1977)。この著作については、筆者の書評をも参照(『経済研究』第三〇巻、一九七九年、八九—九〇頁)。

(5) 併せて、大島真理夫の「訳者あとがき」も参照されるべきである。『伝統と創造』二九四頁以下。

(6) プロト工業化の図式については、斎藤修『プロト工業化の時代——西欧と日本の比較史』(日本評論社、一九八五年)を参照。

(7) 西川俊作・石部祥子「一八四〇年代三田尻辛判の経済計算」(1)(2)、『三田学会雑誌』第六八巻九一—一〇号(一九七五年)、六六六頁による。この論文は、スミス同様一幸判のみを対象としているが、後に西川は、長州藩一円に拡

大して地域所得勘定体系を再整理し、推計を試みた。註9をみよ。

(8) 『伝統と創造』八三頁による。

(9) 前者は、穂本洋哉『前工業化時代の経済——『防長風土注進案』による数量的接近』(ミネルヴァ書房、一九八七年)に代表され、後者は西川俊作の仕事に結実した。その要約は、西川俊作『日本経済の成長史』(東洋経済新報社、一九八五年)、第三章、およびS. Nishikawa, "The economy of Choshu on the eve of industrialization," *The Economic Studies Quarterly*, vol. 38 (1987), pp. 323-337をみよ。

(10) 速水融『江戸の農民生活史——宗門改帳にみる濃尾の一農村』(NHKブックス、一九八八年)、五九頁より。これは西欧において開発された方法の援用である。E. A. リググリー『人口と歴史』速水融訳(筑摩叢書、一九八二年)、九四—九五頁にイングランドの例が載っている。なお、両書は歴史人口学への格好の入門書である。

(11) 『伝統と創造』一一〇、一一二頁、および、アンスリイ・コールとジェームズ・トラッセルによって推計された標準自然出生力スケジュールによる(A. J. Coale and T. J. Trussell, "Finding the two parameters that specify a model schedule of marital fertility," *Population Index*, vol. 44, 1978, p. 205).

(12) この点、斎藤修『比較史の遠近法』(N T T出版、一九九七年)所収の第四章「人口行動をめぐる家族と個人」を参照。

(13) 近世の農書がどのようなものかについては、古島敏雄編『農書の時代』(農文協、一九八〇年)を参照。

(14) 筆者の『伝統と創造』にたいする書評論文をみよ。Osamu Saito, "Bringing the covert structure of the past to light," *Journal of Economic History*, vol. 49 (1989), pp. 992-999.

(一橋大学教授)